

令和8年度防衛大学校入校式

吉田 防衛大学校長式辞

本日、ここ桜花爛漫の小原台において、宮崎政久防衛副大臣をはじめ、多数のご来賓のご臨席を賜り、令和8年度防衛大学校入校式を挙行できますことは、防衛大学校全職員の最も喜びとするところであります。新入生諸君、そしてご列席のご家族の皆様、入校誠におめでとうございませう。この難局の時代に防衛大学校を志した新入生の決意に対し、深甚なる敬意を表します。

本年度は、本科第74期528名、理工学研究科前期課程第65期52名、同後期課程第26期11名、及び総合安全保障研究科前期課程第30期13名、同後期課程第18期3名の学生諸君を迎えることができました。

また、本年も、本科には、タイ王国、フィリピン共和国、マレーシア連邦、インドネシア共和国、ベトナム社会主義共和国、モンゴル国、カンボジア王国、東ティモール民主共和国、トンガ王国及びフィジー共和国の計10カ国23名、研究科には、インドネシア共和国、ベトナム社会主義共和国、モンゴル国及びカンボジア王国の計4カ国7名の留学生をお迎えしました。

さらに本日は、防大が実施しているホーム・カミングデイ行事として、60年前に入學された、皆さんの大先輩である防大第14期生の方々にもご参加いただいております。長年の国防へのご献身に対し心から敬意を表します。

さて、昭和28年4月、榎智雄初代防衛大学校長は、第1期生の入校式に際し、敗戦後の悲惨な状況から国民と共に我が国の再興を期する心構えをお話しされました。以来、73年間、諸君の先輩方は、営々と自らが生きる「時代の責任」を果たし続けてきました。

ロシアのウクライナへの軍事侵攻が始まった2022年を境に、国際社会は、2つの世界大戦の戦間期であるE.H.カーの「危機の20年」の再来ともいふべき、「パワーポリティクス」の時代に入りました。マーク・トウェインは、「歴史は繰り返さないが、韻を踏む」と言いましたが、今、我々は、1世紀前の苦難の歴史を繰り返すのか否かの分水嶺に立っています。諸君は、先輩達の志を引き継ぎ、この動乱ともいふべき時代に

生きる者の責任として、幹部自衛官の道を目指す中で、これからの「時代の責任」を果たしていかなければなりません。

それに加えて現在は、人工知能(AI)をはじめとする先進技術の融合する「第四次産業革命」の急速な進展の最中にあります。特にAIは、社会の仕組みそのものを変えるインパクトがありますが、人間とAIの協同において、AIによって代替することができない人間の役割には、

- 一、志を立てること、
- 二、目標を設定すること、
- 三、決断して責任を引き受けること、
- 四、信頼を構築すること、
- 五、意味づけを行うことがあります。

これら5つは、リーダーシップの要素そのものであり、第四次産業革命によって社会が大きく変革していく中において、将来の我が国の防衛を担うリーダーシップの素地を涵養する防衛大学の社会的価値は、確実に高まっていくことでしょう。

こうした情勢を踏まえて、新入生に望むことを申し述べます。

まず、本科学生については、今後の4年間で、特に以下の3点を修得してもらいたいと思います。

第一に、「志を立てる」ということです。リーダーシップの素地を涵養する上で、出発点となるのが「志の確立」であり、将来、「幹部自衛官」の道に進むことが期待される諸君は、「果たして、自分は幹部自衛官となり、何を成すのか」ということを、時には仲間と「対話」し、時には自分自身で「内省」することで、4年間かけて考え抜いてもらいたいと思います。

第二に、「信頼を構築する」ということです。国の防衛は、自衛隊のみでは成し遂げられません。自衛隊の中での陸・海・空三自衛隊の統合運用は無論のこと、警察・消防・海上保安庁、外務省、経産省等他省庁や地方自治体との協同、同盟国・同志国との連携、国民との協力など、国内外の組織との連携を深める上で基盤となる最も重要なことは「信頼(Trust)」です。諸君は、まず校内で、同期生、上・下級生との信頼関係を構築するとともに、それを徐々に校外へも広げて欲しいと思います。こ

の際、留学生との信頼関係は、将来諸君が主体となる防衛協力・交流の出発点となります。

第三に、「自主自律を体現する」ということです。防衛の務めを果たす自衛官は、他の社会よりも一層厳しい規律の維持が求められます。一方、幹部自衛官がリーダーとして成長するにつれて指導してくれる人は減り、自ら律して高い規律を維持することが必要となります。諸君も1学年のうち、上級生の指導や指導教官の補導等の「他律」による規律の維持が求められますが、4学年に向けて、年々自律の割合を増やしていかなければなりません。諸君が将来、難局に立ち向かう際、最大の武器となるのが「主体性」と「自律性」の発揮であり、それゆえ、学生時代に自主自律を体現することが将来のリーダーとしての重要な素地になります。

次に、修士や博士を目指し、日夜研究に励む研究科学生には、次の2点を要望します。

第一に、「研究の目的に立ち返る」ということです。今後研究を進めるにつれ、様々な壁にぶつかることもありましょう。その際には、常に、「そもそもこの研究を進める目的は何か?」、「この研究により、いかなる課題を解決したいのか?」に立ち返ってもらいたいと思います。ともすれば、我が国の研究開発は、技術(SEEDs)主導になるくらいがありますが、諸君には、是非、運用(NEEDs)主導の研究を心がけて欲しいと思います。

第二に、「他の専門領域との融合を図る」ということです。研究科学生には、卒業後、理系・文系にかかわらず、難局の時代を切り拓くイノベーションを牽引することを期待しています。イノベーションは、フュージョンのあるところに起きます。どうか、自身の専門領域を越えた他の領域とのコンバージェンスを図ってもらいたいと思います。

最後に、私も、本年4月1日付で、第11代防衛大学校長に着任しました。防衛大学校長に、初級幹部から定年まで全うした生粋の幹部自衛官が任用されるのは初めてであり、私には、幹部自衛官としての諸君のロール・モデルとなることが期待されていると理解しています。さらに自衛官退官後の生き様においても諸君のロール・モデルとなるべく、私自身も諸君と共に研鑽を積んでいく所存です。

新入生諸君、本日、ここ小原台において、深い教養を涵養し、人間味溢れる人格を陶冶する日々が始まりました。幹部自衛官にとって、リーダーシップとは、その職にある限り、追求すべき「道」そのものです。ここで修得したリーダーシップの素地は、諸君の今後の幹部自衛官としての基盤になるだけでなく、難局の時代に直面する我が国の羅針盤にもなっていくことでしょう。

改めて、新入生諸君の前途を心より祝して、式辞と致します。

令和8年4月5日

防衛大学校長 吉田 圭秀